

滿濟准后日記

卷子本

(應永廿六年七月廿三日の條)

帝國圖書館所藏



統一を缺き、又人文地理・經濟地理方面の閑却せられたるについても遺憾なき能はず。〔下田〕

## 彙報

### ●帝國學士院の授與

帝國學士院は去る五月十二日を以て第一部にては東京帝國大學文科大學史料編纂官和田英松氏に恩賜賞を東京帝國大學文科大學助教授文學士木村泰賢氏に學士院賞を第二部にては京都帝國大學醫科大學教授醫學博士藤浪鑑氏醫學博士理學博士桂田富士郎氏及び東京帝國大學理科大學教授理學博士柴田桂太氏に學士院賞を授與せり。學界の光榮と謂ふべし。其中史學に關係あるものは和田英松氏の編輯せる宸記集及び同氏の著せる皇室御撰題と木村泰賢氏の著はせる印度六派哲學となり。

猶同院は此機會に於て同志社大學教授法學博士澁本誠一氏に對し氏が多年苦心蒐集して得たる日本經濟叢書完成の功を多とし故桂公爵記念賞を授與したり。

### ●日本經濟叢書の完成

法學博士澁本誠一氏が其半生を以て苦心蒐集に盡したる我國經

濟に關する明治以前の著述は、さきに「日本經濟叢書」として逐次刊行せられつゝありしが、今般其第三十六卷の刊行を以て豫定の如く其完成を見るに至れり。本叢書收むる所は、本多正信の本佐錄、豐年稅書、山崎闇齋の盡徹問答等を始めとし、熊澤蕃山、毛利貞齋、貝原益軒、宮崎安貞等の著作より佐久間象山の上書、岡本信克の治本策の如きまで殆んど經濟に關するものは之れを網羅し、其數二百二十餘部に上り其他雜稿文集、山鹿語類等の如きより經濟に關する記事を抄録せるもの又七十八部あり、尙大體省編する所の徳川理財會要の如きありて、全篇の總紙數實に二萬頁に上れり。尙編者は本叢書の外經濟關係書の通俗なるものを採りて「通俗經濟文庫」十二卷を編し、是又其刊行を終れり。我國に於て此種の特殊著述の殆んど完全なる一大叢書を見るは蓋し本叢書を以て嚆矢とすべく、我國の經濟學史、經濟史の研究が之れによりて受くる所大なるは論なく、又學界の一大慶事たるを失はず。學士院がさきに編者に桂公獎學資金を贈りて賞したること別項記事の如し。而して尙編者は本叢書の續編を刊行し、以て其漏れたるを補はんことを云ふ。

### ●重田定一氏の學位授與

重田定一氏が論文を京都文科大學に提出し學位を請求したるに對し、同大學教授會の審査を経て去る四月八日同氏に文學博士の

學位を授與したり。其提出論文は「賴春坪とその經濟説」を主とし、参考論文として「備後國大田庄」「廣島の新聞地」の二篇を添へたるものなり。

### ●京都帝國大學第九回夏期講演會

京都帝國大學に於ては例年の如く來八月一日より各種學科の智識普及のため第九回講演會を開催し、一般有志者の聽講を許す筈なり、その内史學及び之に關係ある科目及科外講演並びに講師左の如し。(申込期限七月廿日限、委細は京都帝國大學講演會宛照會の事)

古代印度の佛教美術と東洋に於ける其影響、(自八月一日至七日)  
文科大學教授 文學博士 松本文三郎  
考古學研究法、(自八月一日至七日)  
文科大學教授 文學士 濱田耕作

經濟の發達、(自八月一日至七日)  
文科大學助教授 法學士 本庄榮治郎  
支那韻文の構造及修辭法、(自八月一日至七日)  
文科大學助教授 文學士 鈴木虎雄

(科外講演)

時 (八月一日午後七時)

文科大學助教授 文學士 千葉胤成

哀史に彩れる近世澳匈國 (八月三日午後七時)

附屬圖書館司書官文學士 長壽吉

英國最古の叙事詩 (八月五日午後七時)

文科大學助教授 文學士 厨川辰夫

清初の講家を論ず (八月七日午後七時)

文科大學講師 富岡謙藏

### ●滿濟准后日記卷一の上梓

滿濟准后日記は醍醐三寶院門跡滿濟准后の日記にして、應永三十年より永享七年に至る自筆本三十七冊は現に三寶院に藏せられ室町幕府初期の政治外交宗教文學風俗等に關する史實を徵すべき貴重なる根本史料たるも、原本は先きに國寶に編入せられて、容易にこれを窺ふこと能はず、抄本は間々世に傳へて後繼續史愚抄等に引用せらるゝも、自筆本の寫本は僅に二三部あるに過ぎざれば京都文科大學に學界に寄與せんが爲め、先年來三寶院の快諾を得て其上梓を企て、將に活刷に付せんさしたりし時、偶帝國圖書館が三寶院門主の筆に成れる日記を購入せりと聞き、これを調査せしに、全部具註曆の表裏に記せるものにして、書風は滿濟に同じく、書中の記事にも滿濟の日記たるを證すべきものあるのみならず、醍醐寺新要録に法身院准后記として引用せるもの、中本書と同文のものあるを知り、法身院准后は滿濟の事なれば本書の滿

濟准后日記の一部たること疑を容れざるに至れり。然るに本書は應永十八年及び同二十年より二十九年に至る十一卷にして年代は正しく冊子本の首に接續すべきものなるより本書の印刷を先きにするに決したりしが、原本は蠹蝕最も甚しく、殆ど展視に堪へざるまゝあり、(本誌巻頭圖版参照)是等は細心の注意を拂ひて複製を施し、謄寫校勘に年處を累れ、今回漸く其原本に據りて上梓することを待たり。

本書の内容は冊子本に比すれば記事概して簡練なるも、各方面に亘りて有益なる史實を含めり。今僅に其一二を擧ぐれば、應永二十五年八月十八日の條には南蠻より方物を致せること見ゆ。同廿六年には六月以來諸社怪異の事散見し、七月二日の條に異國調伏祈禱の見ゆたるが同二十三日の條に至りて唐船一艘兵庫に抵り我に送りし圖書の案文世に傳はり、十九日幕府の遣せる鹿苑院僧一人唐使を福嚴寺に會して圖書の原本を案文との校合を行ひ歸りて將軍の上覽に備へしに書辭無礙なるを以て文永の如く明使を迫還するに決せると、蒙古軍既に對馬に寇し互に死者を出だし、こと等を載せたり。これ明使の威嚇的文字を載せたる圖書を齎して來朝せることが偶朝鮮の來寇を時を同じうせる爲め我れをして實際間の重大なり誤解に陥らしめし消息を傳ふる好資料とす。八月七日の條には又少貳の捷報到りしことを載せたるが、これに據れば蒙古舟の先陣五百餘艘對馬に寇せしを以て、少貳の代宗右衛門

等七百餘騎これを防ぎ、六月二十六日決戰終日、大にこれを敗り敵將二人を虜にして其自白に依り五百餘艘の悉く高麗のものたること、唐船二萬餘艘六月六日を以て我れに寇せんことを、大風に遭つて過半覆没し餘は逃歸れるを知れりとの記事あり、思ふに高麗の朝鮮にして唐も蒙古も共に明を斥せるもの、此來寇は朝鮮單獨の行動にして、これを蒙古先陣といひ、唐船の大來寇を説くは皆事實にあらず。(本誌第一卷第一號掲載拙稿「應永の外寇」参照)然れども看聞日記に收められたる探題持統の註進狀なるものに比すれば對馬來寇の兵船五百餘艘を高麗のものとする點は當れりと謂ふべく、應永の外寇を決定すべき有力なる史料とす。

今回上梓せられたる本書卷一は冊子本全部にして、本文菊版四百六十八頁、巻頭に滿濟准后の講像及び冊子本の寫眞四枚序言目次を收め、次で卷二卷三に收め、全部の印刷完了するを俟つて發行の豫定なり。(三浦)

### ●京都文科大學考古學研究報告第二冊の出版

京都帝國大學文科大學にては昨年考古學研究報告第一冊を公刊して、肥後に於ける裝飾ある古墳及び横穴の綜括的調査研究を發表したりしが、今回其の第二冊として、昨年六月月上旬同大學に於て濱田教授主任の下に學術的發掘を行へる河内國南河内郡國府村

石器時代遺跡に關する調査研究を取纏め、六月初出版したり。

報告書の体裁はすべて前版に等しく、内容紙數約百頁、圖版約三十葉、地圖一葉より成り、之を別つて本文、附録の二となし、本文は濱田教授の執筆にして、先づ國府遺跡の状態と發掘の動機より、調査の經過を録し、發見の遺物に就いては之を石器、土器人骨等に分つて一々圖と對比して詳細なる説明を試み、後論として發掘の結果より見て、同地出土の大形粗石器の性質を論じ、所謂彌生式石器に關する一新研究を試み、人種問題に及ぶ所あり。附録にありては、河内に於ける類似の同時代遺跡にして近く發見調査する所ありし、中河内郡恩智、南河内郡喜志の二者に就いての梅原囃託の調査概報を載せ、本文との比較に資し、亦た別に國府發見の人骨に關聯して鈴木醫科大學教授の肥後轟、備中津雲等にて發見せる人骨の計測表と、其の人種問題に關する論説を掲げたり。

元來國府の遺跡は畿内に於ける同時代の遺物を出す所とて最も早く知られたる所なるも、未だ學術的發掘の行はれたるを聞かざりしが、此の調査に於て人骨の發見が動機となりて、昨年八月鳥居氏の發掘となり、次で同年十月、本年四月の本山氏主催の發掘調査を行ふあり、何れも皆重大なる結果を齎せり。此の報告書は即ち其の最初の調査を録せるものにして、其の内容に於て彌生式石器の系統を論ぜるが如き、亦圖版に於て多くの新しき試を用

ひたるが如き學界の注意を惹くに足らんか。又末尾附するに英文の概要を以てせるは此の種の研究を海外に紹介する上に資する所あるべし。

●京都文科大學史學科來學年講義題目

史學研究法	二	坂口教授
國史概説(近世)	二	坂口教授
貨幣の進化	二	内田教授
國史演習	二	内田教授
國史概説(中世)	二	内田教授
貞永式目の研究	二	三浦教授
國史演習	二	三浦教授
古文書學各説	二	三浦教授
東洋史概説(上古中世)	二	桑原教授
アラブ人の記録に見えたる支那の風俗	二	桑原教授
東洋史演習	二	桑原教授
東洋史概説(近世)	二	桑原教授
乾隆嘉慶朝の文化	二	桑原教授
東洋史演習	二	桑原教授
講義(公牘)	二	桑原教授
最近世史	二	桑原教授
露西亞近代史	二	桑原教授
西洋史演習	二	桑原教授
西洋史概説	二	桑原教授
ルネッサンス時代	二	桑原教授
西洋史演習	二	坂口教授
地理學通論	二	坂口教授
地理學特論	二	坂口教授
地理學史	二	坂口教授
地理學演習	二	坂口教授
地理學演習	二	小川教授

- 考古學通論
- 東洋考古學
- 古代東方民族の文化
- 人文地理學
- 經濟地理學
- 朝鮮史(三國時代)
- 朝鮮史(高麗末期)
- 土耳其民族史
- 國史概説(古代)
- 國史地理
- 支那金石文(漢碑)
- 十八世紀強國勃興史
- 日本文化史

● 京都文科大學卒業論文

京都文科大學本年度卒業學生の提出せる卒業論文中、史學科並に哲學文學兩科中史學に關係ある題目及び提出者左の如し。

- 史學科
- 國史專攻
  - 法然上人の研究 富森大
  - わが國先史原史兩時代玉類の考古學的研究 辰馬悅藏
  - 大名の成立 牧健二
  - 徳川時代に於ける史學の發達 古田 真一

- 劍道の發達 下川 潮
- 西洋史專攻
  - 獨逸に於ける國民的統一思想 (撰科) 菅原 憲
  - 英國に於ける産業革命 (撰科) 小早川 彦一
- 地理學專攻
  - 山城盆地の地理的研究 工藤 曾一郎
  - 大阪港及神戸港の「ヒンテルランド」の研究 勝田 圭三
- 哲學科
  - 印度哲學專攻 市田 勝道
  - 印度輪廻思想の變遷 塩崎 達人
  - 耆那教の主要教理に就て 山田 保雄
  - 西洋哲學史專攻
    - ゲーノシスの研究 山田 保雄
    - 支那哲學專攻
      - 論語の仁 (撰科) 山崎 宗秀
      - 二程子論 (撰科) 平田 霜初

- 心理學專攻 福富 一郎
- ゼームス、ランゲ説に就いて
- 教育學教授法專攻 中島 桂藏
- プラトウの教育説とフヒテの教育説

宗教教育の方法論

深谷徳郎

希臘教育思想の發展(紀元前四五〇年頃迄)

高橋俊乘

教育思想史上に於けるルソンの位置(委託)

龜山宿海

社會學專攻

植民の基礎としての野蠻人の心理

守屋徳夫

文學科

國文學專攻

大伴家持の歌

高林誠一

亦本作者式亭三馬の研究

(撰料) 原田恭助

國語學專攻

古事記研究史論

佐藤鷄吉

支那文學專攻

柳宗元研究

(撰料) 橋木 循

英文學專攻

In Memoriam, and its Religious Thought

佐竹淳如

A Criticism from the Faith of Shinto.

小西 茂

John Ruskin as a man and His Attitude towards Nature.

篠崎源三

William Blake.

篠崎源三

言語學專攻

朝鮮語と日本語との比較

山根龍太郎

● 史學研究會

例會 三月九日午後一時三十分より京都帝國大學文科大學第九教室に於て門催左の講演ありたり

一、休屠王の金人に就いて 文學士 羽溪了諦君

支那の編年史は周秦時代既に佛教の傳來ありしことを傳ふるも多くは附會の傳説に過ぎず、休屠王の金人に關する記載も亦諸書に散見せられ、一般の學者多くは之を佛像なりとせり。彼の元狩二年春三月霍去病の隴西に出でて焉耆山を過ぎ、匈奴に勝ちて金人を得、之を甘泉宮に祭りし際は、休屠王を經路神と崇めて之をも祭りぬ、王の皇太子にて姓を賜りて金日磾と稱せしは蓋し金人と關係あるものなるべき歟。魏書釋老志此の金人を以て佛像なりと唱へ宋の程大昌等更に証左を擧げて此の説を援くも雖も、余は左記二個の理由より之を佛像に非ずとする者なり。(一)元狩二年頃には印度には佛像の製作の起り居らざりしこと、(二)班固の前漢書を著せしは支那にて佛像流行後二十餘年の時なれば固は新來の宗教に對して多少の智識あるべく、休屠王の金人が果して佛像なりしならば、今少しく詳密なる記載あるべきこと是なり、然らば此の金人は果して何物なるや、余の研究を以てせば、蓋し他民



族の宗教に使用されし金人が匈奴民族の中に流傳せられて匈奴の習慣たる毎年正月五月の交の祭天に祭られしなり、然らば如何なる民族により製作されしか、蓋し印度文明の産物と思はれて所謂佛教以前の印度神像の一なる龍王像が大夏匈奴を経て漢廷に流傳し來りしものなるべく、大夏より匈奴に傳へし民族は月氏族ならむ云々。

一、京都南整寺興廢考

文學博士 新村 出君

本講演は本誌研究欄に掲載する所なり。

例會 五月二十五日午後一時三十八分より京都帝國大學文科大學第八教室にて開會左の講演あり

一、ヘンリ四世時代の獨逸——特に都市の勃興に就いて

文學士 植村清之助君

本講演は本誌叢說欄に掲載する所なり。

一、河内國府石器時代の遺跡 文學士 濱田 耕作君

學士は昨年六月上旬京都文科大學考古學教室にて發掘調査を遂行せる河内國府の遺跡に關して、遺跡の位置、狀態、發掘調査の動機と其の經過就き詳細説明する所あり。引續き同年八月、十月本年の四月に行へる鳥居氏、本山氏發掘の狀況にも及ぼし、此の發掘の結果よりして、同地に多く發見する所謂大形粗石器に關する解釋と、發掘の人體の特徵とを述べて、其の人類のアイヌにあ

らずして、寧ろ固有日本人のものとすべく、日本の石器時代の住民は廣頭彌生式土器及狹頭アイヌ式土器の二大派より成りしなるべしと結べり。

講演後別室に陳列せる同遺跡發見の遺物及び近く本山氏の寄贈に係れる人體三軀を會員の縱覽に供して學士の説明ありたり。

●讀史會

例會 三月八日午後六時より學生集會場に於て第六回例會を開く會するもの三浦、喜田兩博士、西田清原江馬魚澄文學士、古田下川牧宮森鈴木橋川極原の諸君、席上左の講演あり喜田博士が九州地方調査の節採集せられたる各種の土器を展觀し質問應答に時を移して午後十散會せり。

一、九州南部のアイヌ族

喜田博士

博士は先年來實地踏査せられし九州南部の遺蹟遺物により其石器時代の種族に就て大要左の如く説明せられたり、九州南部にアイヌ式土器の往々發見せらるゝあるを以て考古學者或は之を準人の遺物とし準人アイヌ同一民族なりと推定せんとするも、余は又別個の見解を有す、薩摩拵宿の遺蹟にて比較的下層よりアイヌ式土器出て次に彌生式あり上部に祝部即ち朝鮮式陶器の發見せらるゝ、如く思はるゝ事實を以て見れば、初め其遺蹟にはアイヌ族の村落ありしが、後彌生式土器使用の民族即ち準人族と接觸し或は之

に征服せられしものと解すべし、更に所謂日本人と云ふ内には、天孫族の外之に同化せられし土人をも含むものにて、史上に見ゆる華人、海部の族は、其地僻遠なる爲、又職業の爲、比較的後まで同化せられずして残りしものと考へらる、九州南部にも彌生式土器は多く發見せらるゝに就て之を天孫種のものなりとす學者あるも斯くては彼等か他の隣接せる天孫種の文化の推移に後れたるものとせざる可らざるの矛盾あり、故に此土器は却つて華人の遺物なるべし、而して魏志に云ふ倭人(北部九州)と華人とは各種の點に於て相似たるを以て、同一種族たること疑ふ可らず、若しアイヌ式土器使用の民族が華人なりとせば、北部にも其遺物あるべき筈なるに未だ、此事なきを以て見れば南部のアイヌ式土器使用の住民は華人に非ずして金鳥器時代には既に一民族としては其跡を絶ちたるアイヌ類似のものなりと疑はし云々。

一、武家法制に現れたる思想信仰 清原學士

學士は先づ序論に於て思想史研究上資料取扱に就て記録の表面の外裏面を看破すること最も必要なりとて其實例を擧げたる後本論に入りて、貞永式目と新編追加とに見わたる當時の思想信仰を左の六項に分ちて説明せられたり、(一)當時の信仰に於て、幕府は専ら神佛の尊崇を奨励したるも反面には僧侶の甚だしき腐敗あり、又民間には迷信の流行絶えざりき、(二)主従關係は貞永式目

の時代には未だ甚だしく嚴ならず新編追加に至りて始めてや、嚴重なる制あり、(三)父子の關係に於て、父祖の仇討の如きは獎勵せられざりしか如きも、父祖に對しては絶対の服従なりき、(四)人權に關する思想に於て、婦人の地位は平安朝と徳川時代の中間にありて相當に認められたり、御家人の勢力は徳川時代武士の權勢に及ばず、人身賣買は時に之を許したることあり、(五)貞操に關する思想は平安朝の腐敗と徳川時代の嚴格との中間の地位を占む、(六)商人道徳については幕府は常に戒飭を加へたり。

一、上宮疏につきて 橋川君

氏は先づ上宮太子三經疏が奈良朝に於て一般信ぜられつゝありしことに就て、法隆寺緣起資財帳、奈良朝の古文書、淨名玄論略述等を引きて證明し次で所謂上宮疏と支那に於て行はれし關係疏とを對照し、上宮疏中法華維摩の二經は鳩摩羅什の譯本により勝鬘經は求那跋陀羅の譯本によりしものにして三經疏全般に亘りて見る時は支那の經疏を踏襲したる痕跡歴々として指點すべしされどその批判的態度に獨創的價値の存するは言ふを俟たず云々。

例會 四月廿六日午後六時より學生集會場に於て開く、出席者三浦、喜田博士、西田講師、川島、清原、魚澄、中村學士、吉田、宮森、辰馬、下川、鈴木、桑原、橋川、岩橋、梅原の諸君、左の講演あり。

## 一、徳川時代學者の朝鮮文字に關する智識 岩橋君

氏は朝鮮吏道及び諺文に就きて略述せられたる後、我國の學者は多く吏道の性質を誤解し、諺文に就ては僅に備齋叢語、芝察類説、訓蒙字會、類合、玉篇の諸書に據りて知れるのみにて、昆陽漫錄、三國通覽圖説、結睡錄等の如き間接に朝鮮人より聽き知りたりと覺しきものあれども、字體、音價に就ては多く誤れり。太田全齋、黒川春村等は字音研究の資料として韓字音を知らんこと諺文を研究したれども其音價に關して正確なる智識なかりしために却て字音研究の上に累を及ぼしたり云々。

## 一、丹後地方旅行談

## 西田講師

氏は京都府の依囉に依り本月中旬梅原囑托と共に踏査せられたる竹野、中、興謝三郡の史蹟について説明せられたり。今其の概略を紹介すれば、丹後の日本海岸には竹野川其他數個の溪谷ありて古墳、古寺等皆此の溪谷に存し、地形と人文發達の關係を極めて明に示せり。殊に網野町附近の鈍子山古墳、竹野村の神明山古墳は共に山上絶景の處に築ける雄大なる弧形墳にして上代此の地方に於ける大藥族の蟠居を思はしむ。此地方は和銅以前は丹波國に屬し、丹波竹野の地は開化天皇皇后竹野媛の出づる所、又皇子彦坐王、及び其子、四道將軍の一なる丹波道主命等占據地と考へらるべく、又垂仁天皇の妃丹波竹野媛亦道主命の女たり。此地此

等の古墳と相連關して上代の景況を察すべきなり。尙此地方には三代實錄等平安朝の文獻に朝鮮人の漂着する記事を見る。古代に於ても半島の交通行はれしが如し。又此地方山間、古刹の衰頽したるもの少からず今日猶ほ古佛像の遺れるを見る。中にも竹野郡下宇川村上山寺は高山人跡を絶つ處にありて、實徳永正等の懸佛等を見るも、其本尊十一面觀音及び其前立は共に弘仁期の優秀なる作品と認むべきもの、同郡徳光村成願寺の藥師三尊は平安朝末期のものなるべく又中郡丹波村宇矢田の長安寺は一小寺たるに過ぎざるも其本尊阿彌陀佛は實に端麗優麗なる金色の丈六像にして又藤原朝と見るべきものなり。橋本綠城寺の千手觀音は亦平安朝初期の製作なるが如し。同寺又多くの佛畫及び古記録を有す足利尊氏自畫と稱する地蔵尊は素畫の小品にして其一隅に尊氏の花押あるは注意すべく其自筆たるを思ふべきなり。同郡峯山町の壱峯山藩記録は幸にもよく保存せられ嘉永六年ベルリ渡來當時浦賀警備に任じたる同藩の記録は此時代の好史料なり。又社寺方町方の記録ありて町方の中には丹後縮緬業の發達を窺ふに有益なるものあり云々。

研究旅行 八月下旬渡米せらるべき内田博士の送別の意を兼ね、五月十九日乙訓郡地方に一日の遠足を試みたり。當日午前八時三十九分京都驛を發し、向日町に着し同地高等小學校長中西僅三、

粟生光明寺専門學寮講師井口泰溫、及六人部克巳氏等の案内にて先づ桓武天皇長岡宮大極殿址を訪ひ、次で六部人の邸にて所藏の古文書、記録並此地方にて發掘せし古瓦等を觀たるが、延喜四年の奥書ある日本書紀(卷二)壹册、應永廿五年の奥書ある倭姫命世記壹册、天正十三年十一月廿一日同十四年五月十一日の豊臣秀百朱印狀及び應永廿五戊戌事始、同廿九壬寅十一月上禊の向神社棟札一枚等は其の主なるものなり。次で一同向神社、長岡天神に詣り、境内池畔の一茶亭に於て晝餐を共にし談笑時を移し、午後二時粟生光明寺に到る。寺は淨土宗西山派の總本山にして宗祖法然上人の廟所あり。天文十七年十月廿五日の女房奉書及び延寶二年正月大河内浩酒正源秀連の寄進に係る糟粕手鑑等觀るべきもの尠からず、就中糟粕手鑑は徳川時代に諸侯より大河内浩酒正其他の人に宛てたる書狀の末尾を截取りて一册子とせるものにして書狀の餘白には差出人の系圖を記入するなど用意周到なるを示したれば、此の時代諸侯の筆蹟と花押とを知るに便なるものとて一行の注意を惹けり。古文書佛書其他貨物の觀覽終りたる後執事の案内にて御影堂、阿彌堂、本廟等の堂宇を巡覽せり。斯くて午後四時二十四分向日町驛發列車にて歸洛せり。當日參加せしは内田三浦博士、西田、清原、中村學士、古田、辰馬、下川、富森、牧、鈴木、桑原、橋川、六人部の諸君とす。

### ●支那學會

例會 三月十六日午後六時京都帝國大學文科大學第九教室に開く會する者狩野教授羽田助教授會員等二十一人左の講演ありたり、

#### 一、孔子の學問觀

崎山宗秀君

論語中に見ゆる仁なる意義に就き各編其意義を異にせる由を項目を別ちて科學的に論斷し以て孔子の仁に對する觀念を明かにせり。

#### 一、司馬遷の經學

狩野教授

王國維氏の說を引きて司馬遷の生年月を景帝の中五年(西歷紀元前百四十五年)と定め、司馬遷の修學時代は今文學派の行はれたる時代なる故、遷は此の影響を受けたること勿論なるも、太史公自叙に吾十歲誦古文とあり、其他太史公の先輩孔安國との關係より古文をも學べるものなり、易の重卦は文王の時代に初まることいひ、詩は魯詩を學びたるものらしく、春秋は公羊の影響を受くること大なり、故に公羊家の所謂撥亂反正を漢高祖が實行せりと認めたり。公羊家の循環説は文と質なり。然るに史記の循環説は忠(夏)敬(殷)文(周)なり、而してこの三つづつの循環法は禮記表記の意見なり、禮記が古文か今文なるかは議論のある所なるが、司馬遷は其の地位を利用して勵めて廣く諸種の學派をも學びたるものらし云々。

歡迎會 五月四日午後六時東京都帝國大學學生集會場にて今日支那留學より歸朝せられし鈴木助教の歡迎會を開く、桑原、内藤、狩野、高瀬の諸教授、羽田、今西兩助教以下會員の出席者二十三名、鈴木助教の旅行談あり一同歡を盡くして散會せり。

### ● 四書舊鈔本及古刊本展觀

去五月十二日午前十時より午後四時迄落東智恩院山下なる久原氏別邸に於て四書稀觀本の展觀をなせしが、近衛公爵、吉田子爵和田維四郎、内野五郎三、内藤虎次郎、狩野直喜、西村時彦、富岡謙藏、福井成功、田中勘兵衛、鈴鹿義鯨氏等を始め、東西兩帝國大學附屬圖書館、京都府圖書館、大阪府圖書館三寶院、仁和寺、東福寺、建仁寺、久野文庫等より其秘藏に係る珍書を出陳し其點數約五百冊に及ぶ。就中林泰輔氏著「論語年譜」にも記載せられし正和鈔本論語十帖、和田維四郎氏藏は其第一卷末記に正和四年六月七日書寫了とあり、建武鈔本論語十帖(同氏藏)は第一卷末に建武四年三月四日以家說授申飯尾三郎金吾了清原頼元と奥書あり、南朝の忠臣清原頼元が北朝の年號を使用せる點に於て學者の問題となりしものなり。東福寺開山聖一國師が歸朝の際將來せしものと推すべき宋版中庸說一冊(東福寺藏)、内府圖書の朱印ありて清朝皇族の舊藏と一稱せらる、宋版論語二冊(藤田德次郎氏藏)堺刊行の正平版論語一跋本、二跋本、無跋本(和田維四郎氏藏)文

化の中心より遠く距りたる鹿兒島にて版刻されたる延徳版大學一冊(西村時彦氏藏)、正平版を再刷せる明應版論語二冊(北野神社藏)慶長勅版四書五冊(近衛公爵家藏)五山版音註孟子五冊(和田氏藏)奥書には元弘三年十二月九日康運八十三校とある假名論語一卷(十卷の内)、大概文彦氏藏等總て注目すべく、名家稿本及手澤本の中にありては伊藤仁齋白筆語論古義(伊藤孝彦氏藏)新井白石自筆論語記二冊(久原文庫藏)皆川淇園稿大學詳說一冊(皆川鯉彦氏藏)等ありき。

### ● 大和に於ける銅鐸の新發見

銅鐸は我が上代の遺物中特種の位置を占め、從來之が研究は多くの學者に依り試みられたるが、其の出土に際し他の遺物を伴はざる爲、其の性質年代等の解決頗る困難なりき。然るに去る五月五日大和國南葛城郡吐田鄉村大字長柄小字田中六十番地に於て銅鐸が一面の銅鏡と共に發見せられ、こゝに研究の新曙光を認むるに至れり。此地は葛城山の麓に近き傾斜地にあり、村の西方窪地上に新に溜池を設くる工事中、地下約二尺數寸の土壌中より偶然發見せるなり。發掘者の談に據るに鐸、鏡は約一尺を隔て共に畧ほ同一層位にあり、鐸は南の方にありて、鏡を西にして横に埋没せりと云ふ。銅鐸は高さ七寸六分の小形にして瓜皮色の粗末なる製作なり。文様は所々に鏽損じの部分あり且つ磨滅して明ならず、

るも、兩面異なり、一は流水紋にて他は裝裝縹紋を表はせるを認めらる。銅鏡は徑約五寸二分あり。質白銅にして表面には美しき光澤を有す。縁は蒲鉾形を呈し鈕二あり、背面全体に細微なる複合鏤齒紋を配列せり。此二個の遺物の中鐸は特に記すべき程のものには非ざるも、鏡に至りては頗る特色ある遺品にして、此の種の例としては長門國豊浦郡安岡村大字富任發見の一面あるのみ。而して長門に於ける發見の鏡は細形銅劍及び素燒赤色塗り皿と共に一種の箱式棺の内に存在せりと云へば、此方面より其の年代を推すべく、引いて亦銅鐸使用年代の一點を確め得るに至るべし。

### ● 本山氏の河内國府石器時代遺跡

#### 第四回發掘調査

河内國府の石器時代遺跡は昨年六月京都文科大學考古學教室の發掘に次ぎて、鳥居、本山氏等に依りて續行せられ、二十餘軀に上る人骨を發見して人類學上、考古學上の一大記録を作りたるが本年に入りて本山彦一氏は、去る四月十一日より田澤金吾、岩井武俊兩氏に囑して更に前後約一ヶ月に亘る發掘を行ひ、同時に學者の自由研究に委し、大阪醫科大學よりは大串博士、中川學士始終出張して人骨の發掘調査を擔當し、其間京都帝國大學の喜田、鈴木博士、濱田教授、島田、梅原兩氏、愛知醫學專門學校の佐藤助教授等亦交々參加して前三回に勝る良好なる成績を挙げたり。

### 第三卷

### 叢報

### 本山氏の石器時代遺跡調査

### 贈位先賢祭及遺墨陳列

### 第三號

一八三 (五二五)

今までの發掘の状況を概記せんに、今回の發掘地域は同じく國府村字衣縫の窪地上にして、前數次發掘地の南及西に接する部分三十餘坪の區域なり。其の東邊の一隅は地層に一段堀り込める形跡あり。深さ約六尺に及びて、内より多數の完全なる彌生式土器及び石器の埋没せるを發見し、之に混して亦銅鏃三箇、大形勾玉一箇の類を出せり。中央部及び西北の部分に於ては彌生式土器石器等の散布せる地ト約一尺乃至二尺數寸の層位にて約十九軀の人骨を發掘したり。是等は何れも屈葬したるものにて、其の三軀には前回に見たると同じき耳輪を伴ひ、或ものは周圍石積み状態にあり、亦其の一の胸邊より一種の縹紋土器を發見せるあり。人骨の内には層位の比較的淺かりし爲完全せざるものありしも、而も猶頭蓋の畧ほ全きもの六軀あり、回を重ねて貴重なる資料を増し我が石器時代人種問題の解決に光明を與ふべく、亦た遺物が各種類に亘りて饒多なりしと出土状態の明確に調査されたるは人骨と相待つて一般石器時代の研究に多大の寄與をなすものなるべし是等の遺物中人骨二軀は本山氏より京都文科大學に寄贈せられ永く屈葬の儘の状態にて保存せらるゝこと、なれり(以上梅原)

### ● 贈位先賢祭及び遺墨陳列

四月廿八日時の京都府知事木内重四郎氏は明治以來贈位の恩命に浴したる京都府關係の先賢三百三十四の靈を祀りて祭典を舉行

せり。此日久繼梨本賀陽の諸宮殿下の自ら幣を供せられ又は使を遣はし給ひしを始とし、遺族及び朝野名士の參拜する者多かりき式後内田文學博士の「贈位先賢祭所感」の講演ありたり。又同日より五月一日に至るの間、京都府立圖書館に於ては、祀る所の先賢の遺墨數百點を陳列し、公衆の展覽に供せり。

陳列品中、主なるものには、北畠親房、名和長年、三條實隆、織田信長、豊公秀吉、岩倉具視、近衛忠熙の書狀より、山科言繼の日記、細川藤孝古今傳授狀、羽倉東藩、同在瀨香川景樹の詠草伊藤仁齋、同東涯、那波魯堂の詩文稿、墨蹟、武内式部の講義筆記富小路任節の血書祈願書、並河誠所攝津志稿本等ありたり。

### ●名古屋史談會

三月三十日午後六時より名古屋市役所樓上に於て例會を開き、會員石卷良夫氏の「三河岡宇頭に於ける氣入彦命御陵傳説地に就いて」の講演あり。豫て不明なりし深田正壘の墓日出町徳林寺にあることを發見せしを以て、本會は四月十七日午後一時より同寺に於て展墓法要を營み墓所の修理を爲せり。

四月二十七日午後二時兩鍛冶町市立第一高等女學校に於いて古代音曲演奏會を開く、堀田璋左右氏開會の辭を述べ、平家琵琶、御船歌、箏、尺八に就き説明し、是等の古曲の將さに絶へんとするを慨し、其纒に残存せる名家に就き演奏を求むる爲め本會を開き

たる旨を述べ夫れより右各家元の名古屋に残れる人々の平家琵琶尾張藩の御船歌(先帝御東幸の節船中にて詠ひしものを其當時の服裝にて誦へり)尺八、箏の各古曲の演奏あり、此日は本會員の外一般教育界の爲め公開せしを以て來會者四百餘名に及べり。

五月十四日史蹟踏査の爲め中島郡に遠足を行へり。参加せる會員二十二名、午前七時九分名古屋驛發稻澤町下車同所國府宮(尾張大國靈神社)參拜記念植樹を爲し同社の寶物藤四郎作と稱する豹犬一對并に古面、正宗、村正、貞宗を傳ふる短刀、其他古文書等參觀次に尾張學校院址、國衛奮趾等を踏査し、稻澤町にて午餐を共にせり夫れより大塚村性海寺に至り足利尊氏、直義、福島正則、淺野長政等の古文書、弘法大師筆と傳ふる古藪、兆傳司其他の古幅、三尊佛、厨子其他古鏡古器物數等を見、特別保護建造物たる多寶塔等を見、高御堂なる長興寺址を見て解散、一行夫より清州へ出て、更に同所史蹟の踏査をなせるもの少からざりき。

### ●熱田好古會

今回熱田の史蹟保存を目的として熱田好古會起れり、四月二十八日愛知郡會議事堂に於て發會式を舉げ公開講演を開く、午後一時會、文學開士鷲尾祖風氏開會の辭を述べ、文學士堀田璋左右氏は「熱田に於ける一古跡と二古文書に就いて」と題し、誓願寺は元々熱田大宮司の邸内にて源賴朝の誕生地なることは傳説以外に幾多

の史料ありて其概を述べ、其正確なる史實なることを證し、次に熱田の足利尊氏の文書と笠寺文書とに據りて此兩社寺は北朝領なりしことより南北朝史論に及び、尾佐竹猛氏は「熱田貝塚に就いて」其考古學上の地位より發掘の概畧を述べたり。夫れより蓬萊家にて懇親會を開き、席上歴史、考古に關する談論盛なりき五月八日午後七時より圓福寺に於て例會開會、鷲尾祖胤氏の「熱田加藤家の系譜に就いて」詳細の考證あり、終つて尾佐竹猛氏より熱田貝塚發掘品繪葉書を會員一同に配布し、尙ほ熱田神宮古寫眞等を一同の展覽に供し午後十時散會。(以上二項尾佐竹猛氏報)

### ●京都に於ける耶蘇信徒の墓碑發見

さきに京都北野附近に於ては御前通下立賣下る延命寺に三基の耶蘇教徒の墓碑を發見し次で一條通大將軍前の成願寺に於て同じく一基の發見あり。之れに關しては本誌第三卷第一號に新村博士の考證する所ありしが又復六月中旬、兩寺の略中間に當る地に於て更に一基を發見するに至れり。實地に就きて調査したる新村博士の報によると、碑は天神筋通、下立賣上る北町なる淨光寺と云ひし廢寺の舊墓地に残存せる三基の墓石中にありしもの、川井菊太郎氏之を發見し小山源治氏に報じたる所なり。墓石の形状大略さきに發見したる延命寺のもの等しく、其碑面には、上部に

十字架及びHSの標章あり、其下に「□をのはうる」、其左右に「慶長八年六月廿八日」「雪のさんたまりやの祝日」と刻せり。全體の形式より言はゞ延命寺發見のものと同じなるも彼れには上部單に十字架のみを彫せしに此には更に標章のあるは却つて成願寺發見のものに近きを見るなり。尙、碑面の端に「爲開基淨光法師追善也」とあるは、字體彫法已に明かに後世の補刻なるを示すものなれども、又此墓碑研究上興味ある事實と云ふべきなり。

## 會 報

例會 三月九日午後一時三十分より文科大學第九報室にて開催左の講演ありたり。

休屠王の金人に就いて 文學士 羽溪了諦君

京都阿彌寺與廢考 文學博士 新村の出君

五月廿五日午後一時三十分より文科大學第八報室にて開催左の講演ありたり。

ヘンリ四世時代の獨逸特に都市の勃興に就いて 文學士 植村の由君

河内國府の石器時代遺跡(發掘遺品及人骨供覽) 文學士 濱田の作



編纂會 三月廿七日午後零時中より文科大學陳列館貸室に開催  
三浦評議員以下出席、次號擔任者及び起稿者につきて協議せり。  
五月廿三日午後三時より同所に開催、濱田、小川、三浦の各評議員  
以下編輯委員出席原稿を整理せり。

會員動靜

●入 會

大阪市北區中之島一丁目

大阪府南河内郡道明寺村土師社

(右紹介者 岩井武俊)

東京市麴町區元園町二丁目四

(右紹介者 松本彦次郎)

宇治山田市吹上町道場世古、河口熊造方

(右紹介者 橋口長一)

名古屋市外東山村大字代一五三

大阪市南區天王寺大道二丁目南門前

滋賀縣彦根町大字水流

滋賀縣坂田郡柏原村永明寺

大阪市大川町大阪毎日新聞社

(右紹介者 三浦周行)

神戸市兵庫西出町

大阪市外今宮町秋ノ茶屋

(右紹介者 安元彦助)

京都市下京區西本願寺前

京都市上京區新狹町三條上ル

(右紹介者 西田直二郎)

京都市六角通西洞院西へ入

(右紹介者 植村清之助)

京都醫科大學生理學教室

(右紹介者 下川 潮)

東京小石川區原町京北中學校

同

奈良市下御門町

(右紹介者 梅原未治)

東京市深川區西森下町二九

(右紹介者 武田祐吉)

木崎 愛吉

佛教 大學

井口 泰溫

前川英三郎

黒田 源次

佐崎 重暉

足利 衍述

關 信太郎

林 五助

河合 重俊

清水元太郎

安元 彦助

北村壽四郎

服部 俊屋

東野善一郎

武岡 豊太

水谷 望一

土谷旗太郎

村上 靈吉

●死 去

重田 定一 窪美 昌保

●退 會

水谷 望一 土谷旗太郎 村上 靈吉

●寄贈交換書目

「法制を中心としたる江戸時代史論」(吳文炳氏著)

松本彦次郎氏

國史叢書「北肥戰誌」一・二

國史研究會

考古學雜誌八ノ七・八・九

考古學會

史學雜誌二九ノ二・三・四・五・六

史學會

歷史地理三一ノ三・四・五・六

日本歷史地理學會

經濟論叢六ノ三・四・五・六

京都法學會

東洋哲學二五ノ三・四・五・六

東洋哲學會

國學院雜誌二四ノ三・四・五・六

國學院大學

飛驒史壇三ノ一〇・一一

飛驒史談會

佛書研究三八・三九・四〇・四一

佛書刊行會

●正誤

本誌第三卷第一號及び第二號掲載「軌近に於ける東洋史學の進歩」

正誤

號 頁 段 行 誤

正

第一號 六二 下五 Okata(龜茲語) Okata(龜茲語)

同 六四 上四 名刻 石刻

第二號 七八 上二 Samir samir

第三卷 會報 寄書交換書目 正誤

第三號 一八七(五二九)

同

同

同 四 ladine

ladine

同

八二

同 上 四 七曜撰災決

七曜撰災決

同

同

同 十 書名

「persischen」 Kale-  
nder-ausdrücke in

同

同

五 ソノ下語の七曜名

chinesischen Tripi-  
taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

同

同

五 ソノ下語の七曜名

taka.

日曜 mîr  
月曜 mâkh  
火曜 wunkhân  
水曜 tîr  
木曜 wurmazt  
金曜 nâkhid  
土曜 kewân